

2019年8月2日

# ダウエーSEZ 予定地再訪記

## 5年の歳月を経て変わったこと、変わらないこと

アジアコンサルティング部  
シニアコンサルタント 天間 崇文

昨今ミャンマーを訪れる機会の多い私には、ヤンゴン近郊におけるティラワ経済特別区(SEZ)の開発の順調さや、新規投資のニュースに接する機会が多い。SEZに隣接するティラワ港のコンテナターミナルの竣工など、過去にその開発の推進に深く携わった筆者にとっては非常に感慨深いものがある。その一方、ティラワより先に構想された、ミャンマー南東部タニンダーリ管区沿岸に位置するダウエーSEZ(ダウエーSEZ 開発に関するミャンマーとタイの最初の2国間合意は2008年だが、ティラワSEZ 開発に関する日本とミャンマーの最初の2国間合意がなされたのはその4年後の2012年)については、現地の具体的な開発の進捗を耳にすることが少ないように思われる。今回、2019年6月(雨季の真っただ中)に所用でダウエーを訪問した際、現地コンサルタントとともにダウエーSEZ 予定地を5年ぶりに再訪する機会(前回訪問は2014年2月の乾季)に恵まれた。視察時の季節・天候の違いはあるにせよ、以下では、そのダウエーSEZ 予定地に実際に立って5年前との違いを観察・体感した印象をお知らせしたい。

SEZ 予定地には、5年前と同じく、同地の南に隣接するPand-in村から車で入った。今回はあいにく雨季であり、かつ、訪問当日も雨天だったため、赤粘土質の未舗装路は非常にぬかるんでいたうえ、大きく深い穴が各所に空いており、四輪駆動車を利用しなくては立ち往生する恐れがあった。この点、季節の違いを考慮しても、道路の整備状況に5年前からの目立った変化は感じられなかった(写真1)。

そのぬかるんだ道を1時間ほど揺られながら辛抱強く進むと、SEZ 予定地をほぼ東西に貫く、これも未舗装だが幅の広い、路盤がしっかり固められた幹線道路にぶつかった。これが、タイ国境Phu Nam Ronまで続く接続道路の西端部分である。驚いたことに、毎年の雨季の豪雨を経験してきたはずのその未舗装路面は、5年前との違いをそれほど感じさせないほど良好なものだった。また、Pand-in村を過ぎてここに至るまで、カシューナッツ農園と荒野のほかは特に目に付くものはなく、現地住民の家屋や掘っ立て小屋以外の人工建造物はほぼ皆無だった。

(写真1) 南側からダウェーSEZ 予定地に向かう道路 (左 : 2019年6月、右 : 2014年2月)



(出所 : 大和総研撮影)



上記交差点を左に進み、インド洋・アンダマン海に向かって西進すると、5年前に比べて色あせた屋根のビジターセンターが右手に見えてきた。前回訪問時は、現場を管理する Italian-Thai Development PLC. (以下、ITD 社) 社員との会合をここで開き、当時の開発の進捗状況を聞き取ったのだが、この日は土曜日という事情もあってか、人の活動の形跡は乏しかった。

ビジターセンターから更に西へ進むと、遙か南北に伸びるゴミ一つない砂浜を見下ろすように、接続道路の西端 0km 起点がある (写真2)。この周辺も、5年前と同じく人工建造物はほぼ皆無のまま、道路脇に広がる広大な湿地帯にも 5年前からの特段の変化は見られなかった。

ここで記念写真を撮ろうと思ったところ、急に雨脚が強まったので (ダウェーの雨季の雨はヤンゴンより激しくかつ長続きする印象を受ける。現地コンサルタントによれば、ミャンマーの沿岸地域の特徴とのこと) いったん断念し、南下して小規模港湾施設に向かった。その途中、何らかの建物の横を通過したのだが、屋根はめくれ上がり、すっかり廃墟と化していた。確か 5年前は何かの経済活動に使われていたと記憶しているが、放置されて既に相当長いのだろう。

(写真2) タイ国境へ続く接続道路の西端 0km 基点 (左: 2019年6月、右: 2014年2月)



(出所: 大和総研撮影)

0km 起点から南へ 40 分ほど車で進んだ先の、河口部に建設された小規模港湾 (写真3) には、5年前に見た埠頭が若干古びながらもそのままの姿で残っていた。隣には、屋根つきの荷揚げ場所が新設されていたが、船舶の接岸する港として利用されている形跡は乏しく、すぐそばに停泊する ITD 社の浚渫船もすっかり錆びついていた。ただしこの埠頭は、「海釣り埠頭」として大いに役立っている様子であり、良型のシロギスなどを現地人が次々に釣り上げていた (写真4)。今回の訪問中、ダウエーSEZ 予定地内の開発による現時点での目に見える恩恵は、この「海釣り埠頭」だけだったように思われる。また、埠頭から西側の大海原に向かうと、5年前には複数の重機がせっせと碎石を積んで整備・建設していた防波堤が、見る影もなくアンダマン海の荒波に破壊・侵食され、痛々しい姿をさらしていた。

その後 0km 起点まで引き返し、今度は SEZ 予定地北方の Bawah と呼ばれる山間の住民移転先予定地に立ち寄った (写真5)。ここには、旧来の村落に隣接して、いまだに無人の住居と学校施設が建ち並んでいる。家屋周辺の草木の生育ぶりが 5 年の時を感じさせたが、建築物の壁の塗装がそれほど劣化していないことにはやや奇異な印象を受けた。今回がダウエーSEZ 初訪問となる現地コンサルタントは「SEZ 予定地の沿岸住民がこの山間部に移転することは、生業に加え生活上の利便性の落差が大きすぎて容易ではないだろう」と語っていた。

(写真3) 小規模港湾埠頭と防波堤先端部の変化 (左: 2019年6月、右: 2014年2月)

(上段: 埠頭)



(下段: 埠頭から見た防波堤)



(出所: 大和総研撮影)

(写真4) 小規模港湾埠頭での地元民の海釣り風景 (ともに 2019年6月)



(出所: 大和総研撮影)



(写真5) Bawah の住民移転先予定地 (左 : 2019 年 6 月、右 : 2014 年 2 月)



(出所 : 大和総研撮影)

このあたりで、ヤンゴンへ向かう飛行機の時間が迫ったため、いったん接続道路に戻って国道 8 号線に向かって東進する。この東進中も、5 年前とほぼ変わらず、人工建造物はほとんどなく、荒野の湿地に水牛の群れを時折見かける程度である。一箇所だけ、先行開発予定区域の一角に、これも 5 年前と同じく、何かの工場らしきものを遠くから眺めることができた。これまで見た施設とは違って稼働の形跡がうかがえ、平日ならば恐らく大型トラックが出入りしていると思われた。SEZ 予定地の何処かの維持、もしくは、接続道路の工事のため稼働が継続されているのだろう。この付近で後ろを振り向くと、直線道路でありながら、もはや先ほどの 0km 起点は西方の地平の彼方、山並の向こう側にある (距離にして約 15km)。この敷地の巨大さだけは年月を経ても変わることなく、訪問者をあきれさせるに充分である (ダウエーSEZ 予定地の全面積 196 平方キロは、ティラワ SEZ の敷地全面積 24 平方キロの約 8 倍に相当し、日本でいえば霞ヶ浦の湖水面積 220 平方キロに迫る)。今回が初訪問となる現地コンサルタントも、その構想の巨大さに言葉を失っていたのが印象的だった。

更に進んで南北に流れるダウエー川にかかる橋 (5 年前に比べて明らかに老朽化を感じた) を越え、ほどなく国道 8 号線に出た。本来は、ここから東へ更に続くタイとの接続道路の山間部分も視察したかったが、時間の余裕がないので断念し、南下してダウエー空港に向かった。5 年前、この国道は 1 車線のみのアスファルト舗装で乗用車のすれ違いさえ困難な狭さだったが、現在は拡幅され路面状態もよい対面 2 車線アスファルト舗装道となり、快適な走行でダウエー空港まで戻ることができた (写真 6)。結局、5 年ぶりのダウエーSEZ 再訪で最も大きな進歩を感じたのは、この国道の改善である。

(写真6) ダウエーの北側郊外の国道8号線 (左: 2019年6月、右: 2014年2月)



(出所: 大和総研撮影)

今回の訪問を振り返ると、ダウエーSEZ 予定地そのものは、5年前から進歩どころかむしろ「風化」が進んでいるように感じられた。確かに、最近のミャンマー・タイ両国の合意によると、ダウエーSEZ 関連開発の当面の焦点はタイとの接続道路の整備に移っており<sup>1,2</sup>、このままでは、5年前から既に懸案となっていた ITD 社への補償や予定地における住民移転等の諸問題は、ますます複雑かつ解決困難になるのではと危惧される。

他方、国道8号線の大幅な改善に加え、新たな大型ショッピングセンター(写真7)やホテル等の新設で、ダウエーの街は5年前に比べて明らかに活気を増しており、タニンダリー管区の中核都市として更に発展する余地は充分にあると感じられた。加えて、上述のタイとの接続道路が整備されれば、SEZ 開発を待たずとも国境貿易をてこにした相応の経済発展がダウエー地域で実現されるかもしれない。そしてそれを契機として、将来改めて SEZ 開発に対する要望が強まれば、今度こそダウエーSEZ 計画が本格的に始動する、という筋書きも絵空事ではないだろう。

(写真7) ダウエーの大型ショッピングセンターの外観と内部 (ともに 2019年6月)



<sup>1</sup> [https://www.nna.jp/english\\_contents/news/show/20181105\\_0004](https://www.nna.jp/english_contents/news/show/20181105_0004)

<sup>2</sup> <https://myanmarjapon.com/newsdigest/2019/07/24-18157.php>

---

(出所：大和総研撮影)

－ (本文) 以上－